



NAGAOKA-kyō 永都

リーフレット

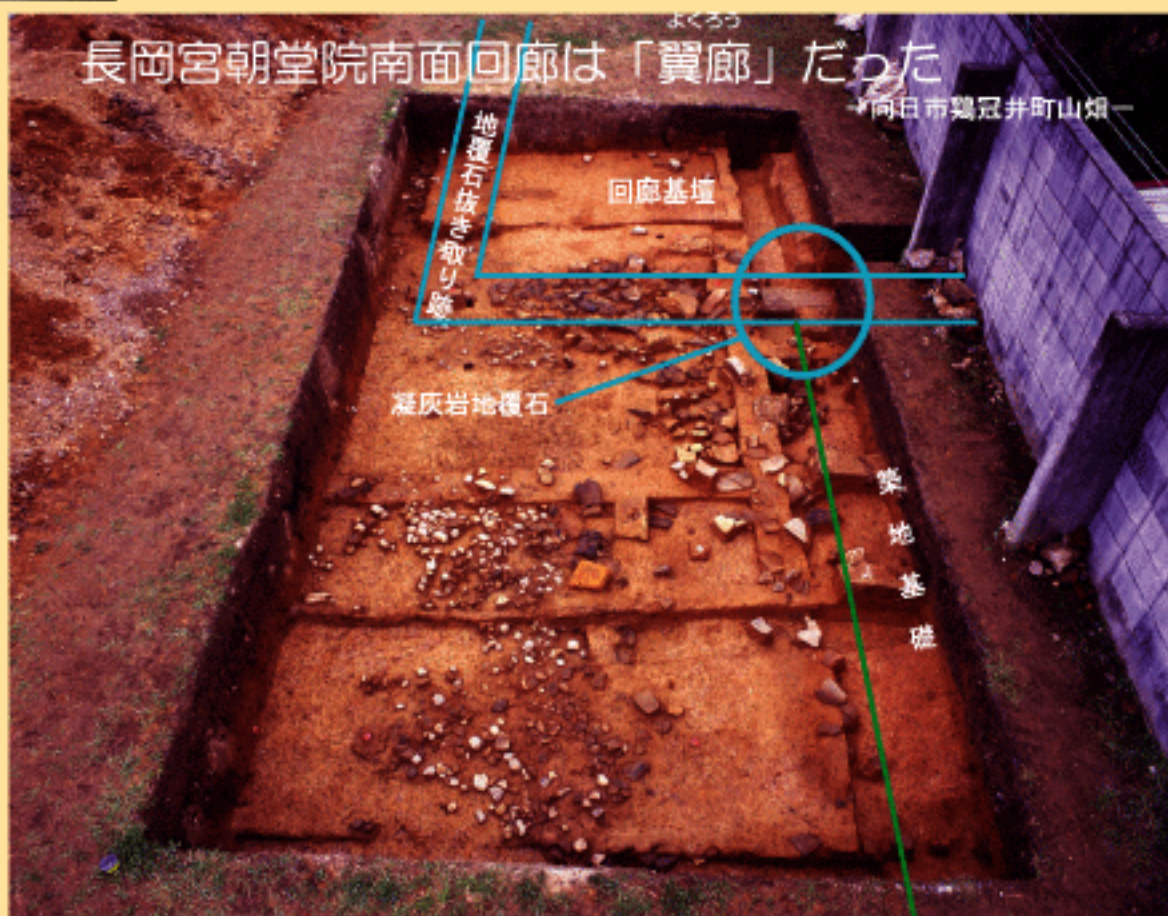
発掘ニュース Vol.7

2005年7月
(財)向日市埋蔵文化財センター

BC
AD

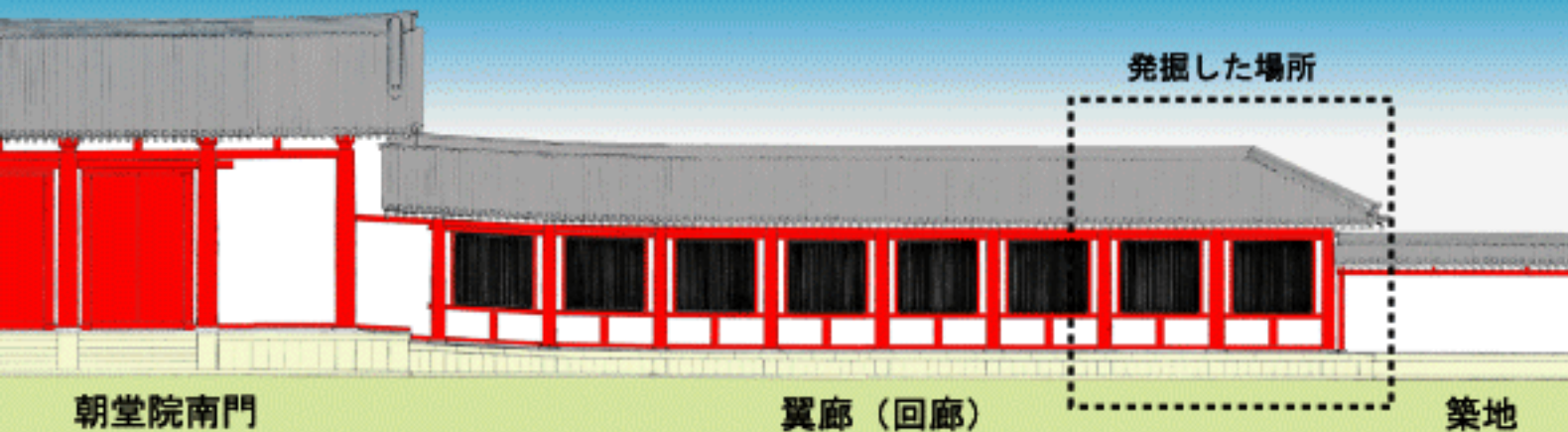
旧石器
縄文
弥生
古墳
飛鳥
白鳳
奈良
平安
鎌倉
室町
江戸
明治
昭和

長岡京
(784～
794年)



「翼廊」とは 2005年冬、阪急西向日駅前で行った発掘調査で、政務や儀式を行った朝堂院南端の区画施設（朝堂院南面回廊ちようどういんなんめんかいろうといいます）が、平城宮や平安宮など他の官都とは違う作りだったことがわかりました。他の官都では、朝堂院南門から東西に回廊（屋根のついた廊下状の軒）が、両端まで続きます。長岡宮は回廊が途中で切れ、東西の端まで築地（土塀）をつないでいました。これを「翼廊」といいます。調査では、東（写真上）から続く回廊基壇（壇状の土の高まり）とこれに沿う溝状のくぼみを発見しました。くぼみは基壇外装（側面がくずれないようにおく石や瓦）の一部である地覆石を抜き取った跡で、基壇の縁をしめします。これが南（写真右）へ折れまがることからこの地点で回廊が途切れるとわかりました。

なぜ「翼廊」がつくられたのか？ これは難波宮（大阪市）との関連から考える必要があります。難波には前期難波宮（7世紀後半）と後期難波宮（8世紀中頃）の2つの宮が造られました。両者は、規模や建物の建て方（掘立柱建物か礎石建物か）などに違いがありますが、大極殿や朝堂院がほぼ同じ場所に建てられており、後期は前期の影響を強く受けたと考えられています。また後期の朝堂院の建物を、長岡宮へ移したことが知られています。調査でも出土した軒瓦はすべて後期難波宮の瓦でした。さて、前期難波宮の官城（大極殿・朝堂院の他、天皇の住まいである内裏や役所の建物などが位置する区画）南面には、古代の官都の中で、唯一「翼廊」が用いられていました。後期は朝堂院の南面や官城南面がどのような姿であったかはわかりませんが、前期と同じ「翼廊」だった可能性は非常に高いと思われます。長岡宮の場合、朝堂院がつくられた延暦三（784）～延暦七（788）年の間は、朝堂院の南面が官城南面を兼ねていたと考えられており（山中1992、山中2001に再録）、「翼廊」を用いる伝統が前期難波宮から後期難波宮をへて、長岡宮にうけつがれた可能性が考えられます。この伝統が平安宮にどのようにうけつがれたか、古代都城の変遷を考える上で重要な成果です。



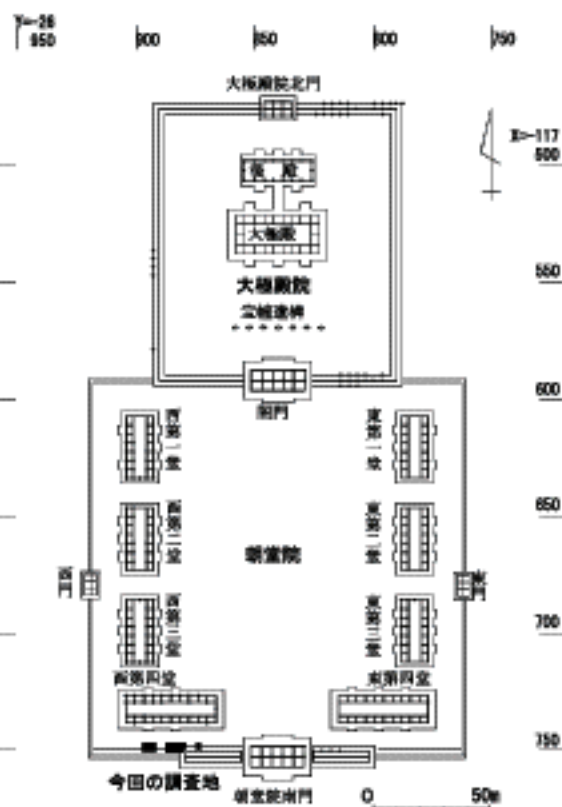
長岡宮朝堂院南面回廊西半部の復原イラスト (北から)

これは、宮本長二郎氏が作成した「長岡宮朝堂院復原設計図」をもとに合成復原したものです。

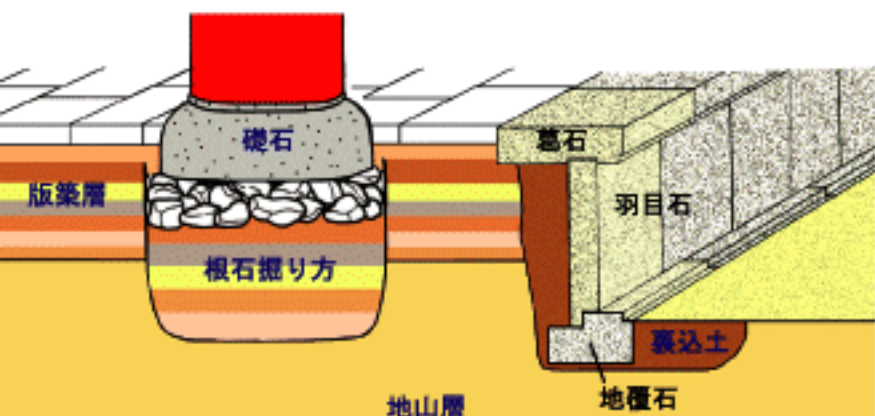


当時のままの姿で出土した凝灰岩地覆石 (北から)

大きさは長さ90cm、幅30cmです。上面に羽目石をはめ込む段があります。凝灰岩は、火山灰など火山噴出物が集積、凝結してできた、灰白または灰黒色の岩石です。軟らかく加工しやすいため、宮殿や寺院の基壇外装や古墳の石棺に用いられました。長岡京では二上山(奈良県香芝市～大阪府太子町)産の凝灰岩が用いられました。周囲に裏込め土が残っていたことから、約1200年前の朝堂院建設時に据え付けられたままの状態とわかりました。平安京に運ばれ再利用されていれば、影も形も残らなかったと思われます。



長岡宮大極殿・朝堂院



基壇外装模式図

左の図は、基壇および外装を模式化したものです。基壇は建築物をその上に建てるためにつくられた土壇です。おもに礎石建物に用いられました。地山を削り残したり、版築(土をつき固めて基壇や土壁をつくる方法。板などで枠を作り、土をその中に入れ、何層にもわたって棒や杵でつき固める)によって構築され、側面は石積み、瓦積みによる垂直壁面(基壇外装)で保護されます。地覆石(じふくいし)・羽目石(はめいし)・葛石(かずらいし)は石積み基壇外装の部分名称です。最下部に据える石を「地覆石」、その上に立てる基壇側面の壁材を「羽目石」、基壇上部の縁に置く石を「葛石」といいます。

【参考文献】

- 山中章「長岡宮城南面と北辺の造営」『奈良制研究』第8号
奈良制研究会 1992年
- 山中章『長岡京研究序説』塙書房 2001年